国語表現学

表現学序説

城戸幡太郎

國語科學講座

— IX —

國語表現學

表現學序説

城戸幡太郎

株式會社

明治書院

國語科學講座

— IX —

國語表現學

表現學序說

城戸幡太郎

株式會社
明治書院

目次

表現學序説

城戸幡太郎

はしがき

表現學といふ術語は今まで我國では餘り使用されなかつたやうである。恐らくこの講座で發表されたのが初めて位ではなかつたかと思ふ。この講座で自分に當がはれた問題は國語心理學といふ項目であつた。しかしこの術語も言語心理學や音聲心理學などに對して餘りはつきりした術語ではない。國語心理學が國語の心理學即ち國語を心理學的方法によつて研究する意味ならば、それは言語心理學や音聲心理學の方法によつて日本語を研究することになる。國語の構造を心理學の方法によつて研究し説明するためには、國語の心理學的解釋といふことが先づ問題になつてくる。しかし解釋には解釋されるもの、即ち表現された國語が前提されてゐればならず、更に表現には表現されるもの、即ち日本人によつて體驗された言語意識が問題となる。表現は理解される體驗の象徵である。解釋學がかゝる表現を問題として、その原體驗を追體驗する方法論を意味するものとすれば、表現學はかゝる追體驗が可能なる理由を體驗と表現との關係について説明するものである。ここに言語表現の心理學的研究の可能が認められると思ふ。そこで自分は解釋學に對して特に表現學なる術語を設定して、この講座において表現學序説の執筆を承諾したわけであつた。垣内松三氏はその後氏の獨立講座において「國語解釋學」に對して「國語表現學」なるものを公

にされたが、氏のいはゆる表現學なるものは、自分の考へてゐた表現學とは問題も方法も違つたものである。今後我國の學界において表現學なる術語が解釋學に對して使用されるとすれば、それらの方法論を明かにしておく必要があると思ふ。自分のこの論文はかゝる意味において文字通りの序說に過ぎないことを斷つておきたい。

第一章　表現學の問題

表現についての學は、解釋についての學がアリストテレスの「解釋について」περι Ἑρμηνειας の研究から解釋學(Hermeneutik)として發展したやうに、まだ表現學として一定の術語を作るまでに至つてゐない。しかし最近になつて表現についての學は人相學（Physiognomie）から發展して廣義に使用され、人間の表出運動一般に關する學として「表現の學」(Wissenschaft von Ausdruck.)なる言葉が用ゐられ、又は表現學(Ausdruckskunde, Ausdruckslehre)なる言葉の使用も見られるやうになつた。[1] 殊にそれが言語學について用ゐられたのはクローチェの「表現の學としての美學及び一般言語學」(Estetica come scienza dell' espressione e linguistica generale. 1902.)であつて、解釋學の如き特殊な術語を形成するに至らないまでも表現の學は獨自の學問として確立されんとしつゝあることは明かである。自分は嘗て自分の心理學を表現的心理學と稱したことがあつた。[2] それは心理學の方法はつねに表現された心の姿を問題として心の表現的法則を研究せねばならぬといふ意味である。從つて一般に心理學は表現の學であるといふこともできるわけである。そして表現された心の姿は人相學が問題としてゐるやうな相貌的表現のみでなく、行動・言語・作品・制度、すべて心の表現された人間の生活形態を問題とするのである。從つてクラーゲスのいはゆる「表現學」が性

格學を意味するやうに、表現心理學は性格の研究を問題とするものであるともいへる。ライグベルトが表現心理學と稱するものはかゝる意味の性格學である[3]。彼によると人相學(Physiognomik)なる言葉はたんに相貌の表現を意味するものではなく、語原から說明するとこの言葉はギリシャ語の φυσιογνωμική (τέχνη) であつて、φύσις 即ち自然についての知識で、人間についてはその本質を明かにする學問といふ極めて廣い意味を有するものであると解釋してゐる。この φύσις なる言葉はギリシャ思想では自然或は本質といふやうな意味を有し、支那思想における性に相應する言葉で、物については物性、人については人性を意味するのがこのフュージスといふ言葉である。從つて Physiognomik は人相學よりも更に廣い意味に解して品性論或は人性論であると考へられても差支ない。かゝる意味での人性論は、解釋學がたんに文章の相貌解析を問題としたに對して、人性の相貌解析を行つてきたのである。そしてその方法として問題とされたのが骨相や手相の如き人相と、人間の作品としては主として書相であつた。人相についての研究に學問的體系を與へたのはカール・グスターフ・カルスであつた。彼は相貌的表現についての學問を象徴學(Symbolik)と稱し、これを構造學(Organoskopie)と、形成學(Physiognomie)と、表情學(Pathognomie)とに區別せんとした[4]。これらを現代の學術語で表はせば形態學と生理學と心理學とに相應するかも知れぬ。しかしそれらの問題がすべて象徴學として研究される點にカルスの獨自な方法論があるのであつて、彼の思想は彼の心理學[5]によつてよく理解することができる。それによると彼は意識に對して無意識を認め、無意識の働きに生命の發展を認めてゐる。生命發展は理念(Idee)から心(Seele)へ、心から精神(Geist)への三段階をとる。しかし理念は一般のうちに特殊を表現するもので、部分はつねに全體のうちに分化されてゆく。有機體はかゝる分節構造(Gliedbaues)を表はすものであつて、身

體も精神もかゝる分節構造において部分のうちにつねに全體としての理念が表現されてゐるものとして理解される。かゝる關係において部分がつねに全體を表現する特殊な象徴として意味づけられるのである。身體における一部分の構造はその全體の構造の意味を表現する象徴であり、身體の特殊な構造を通じて表現される感情は心の全體を表現する象徴である。象徴(Symbol)なる意味は Symbolla 即ち集める意味であつて、全體を部分のうちに集めて表はすことである。無意識は意識のうちに象徴として表はれ、意識は身體のうちに象徴として表はれる。個性とか性格とかはかゝる全體が象徴として部分のうちに表現されることである。

カルスの象徴學はかやうに理解されると思ふが、かゝる意味での象徴學なるものはここにいふ表現學の基本概念を與へるものである。クラーゲスの表現學においては表現は意識の本質表現即ち意慾的人格の表現であり、身體を通じて表現される精神は表現の意味として解明されるもので、身心の關係として成立する表現の法則は解明の法則（Deutungsgesetz）に外ならないのである。從つて言語は精神の解明に役立つ表現學の問題として重要な意義を有するものと考へられる。しかし彼の表現學においては筆蹟が言語よりも重要な問題として研究されたので、表現學としての彼の性格學の方法は主として筆蹟による書相學(Graphologie）によつたのである。[6] 表現の法則が解明の法則としてたんに體驗の類推によつて解釋されるに止まるならば、それはいはゆる解釋學と變るところのないものとなる。ディルタイは彼の精神科學の問題を體驗と表現と理解との三つの基本概念から解決せんとし、體驗の記述及び分析を問題として記述的及び分析的心理學或は構造心理學の方法を認め、表現の理解を問題として個性心理學の方法を認めたのであつたが、體驗の表現を問題としては如何なる心理學の方法を認めてゐたかは疑問である。しかし彼は實在心理學（Re-

alpsychologie）なるものを構造心理學の次に、個性心理學の前に問題とされるべきものと考へてゐる。(7) 彼のいはゆる實在心理學なるものが如何なる心理學であるかは彼の叙述によつては明かでないが、ロッツェが理念心理學（Idealpsychologie）に對して認めた心理學の意味に解することができるとすれば、ロッツェのいはゆる記述的或は經驗的心理學に對する說明的機制的或は形而上學的心理學に相當することになる。しかしディルタイの思想からすれば彼の心理學が說明的心理學であることは認容されないであらう。現實のうちに理念の發展を認めんとするのがディルタイの思想である。體驗と理解との關係は表現を通じて可能である。表現のうちに體驗も理解も含まれてゐる。構造心理學と個性心理學とは表現の問題のうちに解釋される方法でなければならぬ。ディルタイによれば構造心理學の方法は體驗内容の聯關により、個性心理學の方法は解釋によると考へてゐるが、表現の問題は比較法によつて研究されることを認めてゐる。然らばこの方法によつて研究される心理學の問題は精神の發達であり、從つてこれは發達心理學の問題として研究されるべきものである。ディルタイの實在心理學が發達心理學を意味したものであるか何うかは疑問であるが、表現の問題は意識の實在、即ち歷史的社會的現實態としての意識を發達心理學の方法によつて研究すべきものと考へられる。ディルタイの精神科學の方法はディルタイ學派の心理學者によつて了解心理學（Verstehende Psychologie）として發展せしめられたが、體驗の了解を可能ならしむる表現の問題については、實在心理學としての表現心理學なるものが發展せねばならなかつたのではないかと思ふ。そして心理學的解釋なるものが解釋學を成立せしむるものとすれば、意識を歷史的社會的現實態として表現する心理學的技巧の問題が、表現學を成立し得ないとはいへないであらう。

言語はかゝる心理學的技巧として考へることができる。言語の表現は自己の體驗に關して他人の理解を要求する。かゝる意味において言語の表現はたんなる自然ではなく技巧である。カール・ブューラーはディルタイが心理學の問題を體驗と表現と理解とに求めたやうに、體驗と行動と技能(Erlebnis, Benehmen, Leistung)とに求め、現代の心理學を、これらの問題のいづれに重心をおくかによつて體驗心理學・行動主義・解釋心理學といふやうに區別してゐるが、これに應じて言語の理論についても言語を體驗の立場から論ずるものと、行動の立場から論ずるものと技能の立場から論ずるものとに區別して考察してゐる。[8] 言語は勿論これら三つの樣相を有するものであるが、體驗の立場のみからは言語の機能は說明されず、たんに行動の立場のみからも說明されぬ。動物が彼等の行動を媒介として互に了解し合ふても、その行動を直ちに言語といふことはできぬ。人間の言語が動物のそれと異る所以はたんに告知し認知するといふ關係を示すのみでなく、敍述するといふ機能を有することとである。ビューラーは言語の機能を告知(Kundgabe)と開發(Auslösung)と敍述(Darstellung)との三段階に區別したが、この敍述機能を言語の本質と考へ、敍述の意志において他人による理解を豫想するものとして言語の社會的意義を明かにせんとした。彼はここに言語の技能的意義を認め、その說明原理として指導(Steuerung)なる概念を導入せんとしたのである。表現が理解を豫想する限り、それは意識或は體驗の歷史的社會的現實態を離れては問題にならないのである。言語がかゝる表現の問題として考察される限り、それはやはり歷史的社會的現實態として問題になるのであつて、そこに言語は、個人の主觀的精神を超越し社會の客觀的精神としてその實在性が問題とされるのである。ラツァルス及びスタインタールが民族心理學の問題として言語を硏究せんとしたことも、またヴントがこれを繼承して言語を民族精神の問題として考察せんとしたこと

も、言語の機能はたんに個人精神の問題としては取扱ふことのできぬことを認めたものであつた。しかしヴントの民族精神なるものは、言語のうちに認められる意味の客觀性として問題とされ、その本質を明かにせんとするものではなかつた。彼の方法は民族精神の表現として考へられる言語を一般心理學の方法で說明せんとしたに過ぎなかつた。従つて言語がたとひ民族心理學の問題として硏究されたとしても社會學者の側から見れば、言語の社會的意義を充分に解明したものとは認められなかつた。従つてデュルケイム學派のメイエの如き言語學者は言語を社會的事實としてその拘束性を明かにせんとしてヴントなどの言語心理學に對して言語社會學なるものを樹立せんとするに至つたのである。(9) しかし彼等の言語社會學なるものは意味の成立を社會的條件から說明するといふよりも、意味の適用を社會的條件から說明するものである。これは確かに言語心理學では問題としなかつたものであるが、しかしこの問題の解決によつて言語心理學の問題が解消するものではない。言語社會學の問題はデュルケイム派の社會學者が問題としたもの以外に意味成立の條件について更に新しき問題を提供するものである。それは言語における客觀的精神としての意味の問題であつて、ディルタイ學派のフライヤーの如きは記號及び意味を客觀的精神としてその客觀性の意義を明かにせんとしてゐる。(10) 彼は意味の客觀化を三つの見地から問題としてゐる。第一は、記號の意味は客觀的であつて、それはその意味として精神的體驗を有してゐるのではなく、對象的事態を有してゐる。第二は、記號が存立してゐる限り、その意味を自からのうちに有してゐるので、その成立過程からは解放されてゐる。自分はその意味をその作製者及びその精神情態について、又は表現の作用について知り或はそれを心理學的に解明する必要もなく理解する。第三は記號は意味ある行動ではなく、物質的形像（materielle Gebilde）であり、それを表はした生活者に對して物體的に

獨立し、表現作用の持續を超越してゐる。言語はかゝる意味内容を持つ記號の一つである。從つて言語は主觀を超越した客觀の存在であり、社會的形象の一つであるといふことができる。かゝる社會的形象は必ずしも拘束性を有する社會的事實でないとしても、それは主觀的精神を超越した客觀的精神としての文化である。しかし吾々は果してかゝる客觀的精神を主觀的精神から全然超越した現實性として研究することができるであらうか。客觀的精神は主觀的精神の基礎の上に成立する。人間を超越した文化といふが如きものが考へられるであらうか。成立したものを成立過程から切離して考へることは、可能ではあらうが、その事理を充分に理解することはできぬ。如何にも貝殼は貝殼としてその在在の形象は問題になる。しかし貝殼の性質を充分に理解するためにはその成立過程を明かにせねばならぬ。言語をたんに客觀的精神としてその形象のみを問題とするのは恰も生物學が貝殼の形態をその發生的條件から切離して研究するが如き態度である。表現學は言語の意味についてその社會的事實としての拘束性も社會的形象としての客觀性も認めないものではないが、その表現を問題とする限り、その發生的條件を無視することはできぬ。言語の表現學としては言語心理學は言語社會學と區別されるものではなく、言語の表現を人間生活の形態から考察すればよい。表現學の對象として問題とする言語は、理解されまたは解釋されたものとしての言語を意味するのではなく、むしろ理解され、または解釋さるべきものとしての言語表現を意味するのである。表現を表出といふ意味に解すると、それには表現される內容と、表現された形式とが區別される。しかし果して表現にはかゝる內容と形式とを區別することができるであらうか。例へば表情として感情の表出が考へられる時、一般に表現されるものは精神的な感情であり、表現されたものは身體的な運動であると說明されるが、しかし表出運動そのものが、如何にして感情の表現であると

考へられるか。そこにはものを二つの相から抽象して見る立場がある。即ちものを外面から見るといふこと丶内面から見るといふこと丶の二相觀がある。しかしか丶る内外の二相觀はものの本質を理解した見方ではない。内から觀たものと、外から見たものとが、つまり同一のものを異つた立場から見たものに過ぎないならば、か丶る見方はものを眞に理解したことにも説明したことにもならぬ。われわれの知識はまだものの内面と外面との限界を明かにする方法を持つてゐない。か丶る認識の方法から見て表現を内面的なるものが外面的に現象することなどと考へてはならぬ。從つて、それと同時に表現を理解することは、外面的なるものから内面的なるものを見透すことなどと考へてはならぬ。表現とはか丶る意味において、ものが他のものとの聯關において存在する仕方を意味するに過ぎぬ。意識をものの表現と考へることは、ものが意識に表現されるのである。世界に對する人間の實踐的交渉によつて世界は人間の意識に樣々な世界觀として表現される。か丶る人間の實踐的意識を通路として世界と世界觀との關係を明かにするのが表現學の問題である。言語はか丶る意味において人間の世界觀が表現される存在の通路である。われわれが言語のうちに理解するものはたんなる人間の意識ではなく、意識に表現された世界觀即ち世界の意味である。從つて日本語を通じて理解されるものは日本人の世界觀であり、か丶る世界觀の發展は日本人の實踐的意識に實現する世界の必然性である。主觀的なるもの丶うちに客觀的なるものが必然的に現象する法則を發見することが表現學の問題であり、言語を通じて日本人の表現する世界觀の性格を理解するのが國語表現學の問題である。そして國語表現學の方法としては國語を表現するわれわれの意識的態度を二つの樣相から考察することが必要である。一つは可能性としての對象であつて、研究者が問題とする對象である。例へば「あかし」「あをし」「きいろし」などの語の表現法を理解するには、

それの表現が可能となる色彩の存在を問題として設定しておかねばならぬ。二は現實性としての意識であつて、われわれの表現してゐる言語意識である。例へば「あかい」と「あをい」とが發音される場合、發音運動の相違、更に音韻の相違、從つて意味の相違が意識され、または「あかい」といふ意味を表現する場合に、「あかいね」「あかいわ」「あかいわね」「あかいよ」「これはあかい」「ほんとにあかい」「あかいじやないか」などと樣々に表現される場合、それぞれの意味が表象されてゐる色彩に對して特殊な情趣を持つてゐることを意識することである。三は必然性としての表現であつて、對象と對象の意識との關係として發見される法則である。例へば「あかし」「あをし」「きいろし」の三原色は形容詞として表現されるが他の色を表現する詞は形容詞としては表現されない。そこには國語の表現法として何らかの法則が働いてゐるのではないかといふ疑問が生ずる。それを説明するのが表現の法則の發見である。而してかかる表現の法則を發見するには國語の文獻について歴史的考察を行ふことが必要であると同時に、國語の表現について實驗的考察を行ふことも必要である。表現學的實驗の方法としては心理學的實驗と同樣に先づ對象の設定が問題とされ、それによつて實驗の處置が工夫されるのであつて、われわれが一定の對象を表現しようとする場合には表現せんとする經驗の立場が定められるのである。われわれの意識はかゝる經驗の立場によつて表現されるのであつて、その表現には對象のあらはれとあらはしとあらためとの三つの態度を認めることができる。「あらはれ」は對象がわれわれに體驗されることで表現の基礎となるものであり、これに對して「あらはし」はかゝる體驗を一定の形態として表現する方法である。言語はかゝる表現法の一つであつて、音聲によつて對象の意味を表現せんとする方法である。これに對して「あらため」は作者によつて對象を新に建て直す工作である。言語の場合には言語を改造する場合であつて、

意味の變化・翻譯・新語の工夫などがこの「あらため」の表現に屬するのである。この論文においては主として言語表現學としてのこれらの三つの表現形態について論じてみたいと思ふのであるが、表現學の方法を更に明かにするために從來の言語學と言語心理學との關係について考察してみたいと思ふ。

註 1 Klages, L. Ausdrucksbewegung und Gestaltungskraft. Grundlegung der Wissenschaft von Ausdruck, 2. Aufl. 1921.
Bühler, K. Ausdruckstheorie. 1933.

2 表現的心理學の方法について、（日本心理學雜誌、大正十四年）

3 Reigbert, R. Ausdruckspsychologie und Praktische Pädagogik. 1929.（心理學研究、第六卷、第一輯、寄贈）

4 Carus, C. G. Symbolik der menschlichen Gestalt. 1853.

5 Carus. C. G. Vorlesungen über Psychologie. 1831.
Psyche, zur Entwicklungsgeschichte der Seele. 1846.

6 Klages, L, Einführung in die Psychologie der Handschrift. 2. Aufl. 1923.

7 Dilthey, W. Gesammelte Schriften. Bd. 8.

8 Bühler, K, Die Krise der Psychologie. 1929,

9 田邊壽利、言語社會學（國語科學講座）

10 Freyer, H, Theorie des objektives Geistes, 1923.

第二章　言語表現學の方法

言語學においてはソッシュールが問題としたやうに、(1) 言語學を共時言語學(linguistique Synchronique)と通時言語學(ling. diachronique)との二つに區別して研究することが、果して可能であるか何うかゞ問題であるやうに、心理學においてもブレンターノが心理學を記述心理學と發生心理學とに區別したことは現代の心理學の方法として大きな問題を遺してゐる。言語が社會的事實として變化し發達するものであることは疑もないことで、これを問題として研究する言語學が歴史的考察を無視することのできぬことは勿論である。しかしこの方法に對して果してソッシュールのいはゆる共時言語學に相當する一般言語學或は一般文法學といふが如きものが果して可能であるか何うかゞ問題である。歴史が一般法則の概念を否定するところに歴史としての意味があるであらう。歴史的事實として認められる言語を果して一般の法則の概念によつて認識することが可能であらうか。しかし言語は人間の意識において表現される事實であるといふことも否定するわけにはゆかぬ。言語が意識的事實として表現される限り、言語の表現は意識について研究する心理學の問題と聯關してゐる事は必然である。然るに心理學の問題は人間の精神現象が絶えず流動變化するものであることを認めながらも、その變化のうちに一定の法則の存することを認めようとする。ここに精神發達の法則なるものが問題となるのであるが、かゝる法則が認められるならば、通時言語學即ち言語史の問題は心理學の方法によつて研究されることになり、少くとも言語をその具體的存在の姿に於いて問題とする限り、それは歴史的社會的存在として通時的見方と共時的見方とを嚴密に區別することはできなくなる筈である。しかし心理學の方法として記述心理學が發生心理學に對して區別され、意識現象の本質がいはゆる内部知覺の方法によつて認識されるものとすれば、一つの意識現象としての言語、即ち言語意識の本質なるものは記述心理學或は現象學の方法によつて認識

されねばならぬものである。ソッシュールが共時言語學の問題として提供した言語の具體的實在における言語的單位の恒常性・實在・價値などの認識は、通時的即ち歴史的發生的見地からは明かにすることのできぬ問題であつて、これを心理學の問題としてみれば、言語の記述心理學的方法であるといふことができる。ブレンターノの心理學はこの二つの方法論的對立から、その記述心理學は後にフッセルなどによつて現象學として研究されるやうになつたのであるが、これをやはり心理學として取扱はんとするならば言語心理學は言語學に於ける共時的と通時的との對立の如く、言語の記述心理學的考察と發生心理學的考察とに區別さるべきである。マルチーの如きブレンターノ學派の心理學者によつて研究された言語の問題が一般文法學或は言語哲學と稱せられるのは、その方法が主として記述心理學によつてゐるからである。[2] 一般に言語心理學が言語哲學と同義に解されてゐるのも、心理學が記述心理學と發生心理學とに區別されてもそれが共に心理學と呼ばれてゐるからである。心理學におけるこの方法論的二律背反が超克されない以上、言語心理學と言語哲學とは嚴密に區別することはできぬ。しかし現代の心理學に於いてはこの二つの方法は明瞭に區別されつゝあると同時に、一般心理學の方法として統一されんことを要求しつゝある。

ブレンターノの心理學では內部知覺と記憶と表出との三つの基本概念が認められたが、これらが一つの心理學的方法として統一されることが問題であつた。記述心理學の方法としては記憶を豫想した內部知覺の問題を取扱ひ、發生心理學の方法としては內部知覺を豫想した表出の問題を取扱ふのである。從つて心理學の問題としては內部知覺及び表出に對して先づ記憶といふことが重要な意義を持つてくる。グラーツ學派の心理學では內部知覺によつて把握される表象の形態は主觀の作用において認められる態度（Einstellung）によつて產出されると考へるのである。この態度

を成立さすものは記憶としての素質(Disposition)に外ならぬのである。グラーツ學派の心理學が複合心理學(Komplexionspsychologie)と呼ばるゝと同時に素質心理學(Dispositionspsychologie)と稱せらるゝのはかゝる見方を採るからである。しかし問題はその複合と素質との概念であつて、複合は意識される事實であるが素質は意識される事實ではない。かゝる意味に於いて態度といふことが心理學において如何に取扱はれるかが吟味されねばならぬのであるが、これをやはり意識の事實と考へて、意識に現象する樣々の態度を意識の作用として研究せんとする學派が生じた。それがキュルペを祖とするヴュルツブルグ學派であつて、マルベ、アッハ、コフカ、ビューラー、メッサーなどがこれに屬する心理學者であつた。

この學派の心理學では、意識の內容に對して作用を特殊な意識的事實として認めようとする。マルベが識態(Bewusstseinslage)と稱したり、アッハが意識性(Bewusstheit)と稱したものはかゝる內容に對する特殊な作用を意味するものである。例へば一つの表象が他の表象を聯想する場合に、表象されてゐるものは意識の內容であるが、一つの表象內容から他の表象內容が聯想される場合に意識される期待や緊張や滿足の如きものは內容に對する作用卽ち識態或は意識性と稱せらるべきものである。しかしかゝる意味での作用はブレンターノが內容に對して認めた作用とは同一に考へられないものである。ブレンターノの立場から見れば識態とか意識性とか稱するものも、それが少くとも意識されるものとしての事實であるとすれば、それはやはり內部知覺の方法によつて認められる意識內容に外ならぬのである。ヴントがそれらを感情の性質に過ぎないといつたのも、感情についての考へ方の相違にもよるが、要するに意識の內容に過ぎぬといふ意味に解せられる。從つてそれらを意識內容から區別して考へようとするならば、意識する

立場、即ち記述的立場と意識され、記述されたものを説明する立場とを區別して考へねばならぬ。或る個人によつて意識されたものは、心理學における研究資料としての意識の實體概念（Substanzbegriff）で、函數概念（Funktionsbegriff）ではない。(3) 記憶とか素質とか態度とかは、心理學における實體概念としてではなく、函數概念或は機能概念として取扱はるべきものである。この點についてはコフカは記述概念（Deskriptionsbegriff）と機能概念（Funktionsbegriff）とを明かに區別せんとしてゐる。記述概念は直接の知覺及び體驗の記述に基くものであり、機能概念は客觀化された體驗に基いて構成されるものである。(4) この二つの概念は心理學に於ける記述心理學と發生心理學との方法を明かに示したものであつて、アッハの如きも、後には心理學的方法を現象學的部分（Phänomenologischer Teil）と力學的部分（Dynamischer Teil）とに區別し、意識性の問題をこの二つの概念から問題にせんとした。(5) しかし後のいはゆる意識性或はマルベの意態の如きは、明かにこの二つの概念規定から見れば現象學的部分に屬するものであつて、志向（Intention）或は緊張（Spannung）といつても、それは意識性として考へられる限り、現象學的概念に過ぎぬのである。從つてヴュルツベルグ學派の方法はたとひ實驗的方法を用ゐても、それは意識現象の組織的觀察を可能ならしむるための方法であつて、その結果として得らるゝものは意識の現象學的部分が主となつてゐるので、その力學的部分としてはアッハのいはゆる固執性や決定傾向の如き概念が認められるのである。しかしこの學派によつてなされた言語による聯想の實驗の如きも主として聯想の現象學的記述であつて、力學的説明には及んでゐないのである。マルべなどによつて實驗された言語的類推の實驗的研究の如きもやはり聯想の現象學的記述に外ならないのである。(6) しかしキュルペが既に明言してゐるやうに心理學の問題は精神的實在の措定（Setzung）と規定（Bestimmung）とにあり、

精神的實在の措定として、彼は次の如き外界に對する內界措定の規準を示してゐる。

一、知覺における吾々から獨立せるものについての表現としての外界に對して、意識內容についての表現としての內界。

二、知覺の原因としての外界に對して意識內容の原因としての內界。

三、知覺を統一的に關係せしむる客體としての外界に對して、意識內容を統一的に關係せしむる主體としての內界。

四、社會現象としての外界に對しては、社會といふ概念が既に他人を豫想してゐる限り、內界の措定を前提するものであるから、この問題は他人の精神生活の問題として別に措定されねばならぬ。

五、知覺の連續を條件づけることゝしての外界に對して、意識內容の連續を條件づけることゝしての內界。

六、知覺から獨立した法則性の基體としての外界に對して、意識內容から獨立した法則性の基體としての內界。

これらの問題について詳しく論ずる必要はないが、ここに注意すべきは、實在科學の方法としての表現・原因・統一・連續・基體の五範疇が心理學にも適用されることであつて、ここに心理學における實體概念の措定が可能になるのである。しかしかゝる措定に基いて次に問題となるのは措定された存在の本質を闡明する規定の問題である。ここに實體概念に對する機能概念或は關係概念の規定が必要となるのであつて、意識內容の表現・原因・統一・連續に對し、それを超越した法則性の基體を認めるところに意識內容の機能的規定が必要となつてくる。キュルペは知覺の表象(Vorstellung)に對して意識內容の表現(Ausdruch)を區別するが、かゝる表現は外界が存在するとか、或はかゝ

るものが措定されるといふ供述(Aussage)といふことである。しかしてかゝる供述は經驗のたんなる再提供ではなく、經驗がかゝる表現のうちに叙述されるときには、それは既に反省によつて影響された經驗である。從つてわれわれによつて表現された經驗は對象そのものではなく對象の意味である。キュルペはかゝる意味を文法的意味と論理的意味と客觀的意味との三つの方向から考察せんとしてゐるが、心理學の問題としては意味された對象即ち對象の表現を問題とするのであつて、表現するものゝ主觀的經驗を措定することが第一の問題である。そしてそのためには先づ直接または間接にその表現としての供述を心理學の資料として、その資料批判(Quellenkritik)をせねばならぬ。これは文獻學者や歴史家がやるのと同じ意味を有するものであるが、ここに心理學の方法が言語批判なくしては成立し得ない理由を認めることができるのである。キュルペはそれに心理學固有の方法を認め、それを現象學的、記述的方法と説明的方法との二つに區別したのであるが、これは記述心理學と説明心理學との方法を同時に認めるものであつて、この二つの方法の統一が問題となるのである。記述的方法によつて主觀的經驗が措定されるのは自己觀察によるのであるが、それには與へられた問題を處理せんとする態度が、意識内容を統一し連續せしめる内界の原因として認められてゐるのである。それで觀察によつて表現される内省の報告(Kundgabe)は一定の問題に對して要求された解答として表現されるものであるから、その報告には問題の提出とその解決の方法とが言語の意味として表現されてゐるものと考へねばならぬ。從つて報告者によつて供述された記錄(Protokoll)はたんなる觀察された經驗的事實の再提供ではなく、報告者の態度が表現されてゐる主觀的經驗である。心理學者はかゝる記錄によつて報告者の主觀的態度を質問せねばならぬ。從つて一般に内省報告を直ちに意識内容そのものゝ表現であるかの如く考へてはならぬ。問

題の與へ方によつて報告の出し方は違つてくる。心理學で實驗といふのは實驗者の問題の與へ方であり、觀察といふのは被驗者の報告の出し方である。從つて心理學的實驗においては問題提出の方法と記錄表出の方法とに一定の組織がなくてはならぬ。組織的觀察といふのはかゝる實驗の方法をいふのである。(一)

これによつてキュルペの心理學は、その方法としての資料批判のうちに言語批判の問題を持ち、彼の表現の問題は內容と對象との關係に關してリップスのいはゆる象徵的關係(Symbolische Beziehung)の問題の再吟味を要求するものであるといへる。リップスは作用に對して內容と對象とを區別する。これはマイノングを主とするグラーツ學派の心理學における區別の仕方とは多少趣を異にしてゐる。マイノングにおける對象は內容に對する認容(Annahme)として表現されたもの(Präsentation)であるが、リップスにおいては內容は自我が持つ(Haben)ものであり、對象は自我が考へる(Denken)ものである。そしてかく內容として持たれてゐるものはわれわれの意識に受容された體驗であるが、對象として考へられたものはわれわれの內部知覺卽ち心眼を以て見られた作用である。かゝる意味で考へられた對象はマイノングのいはゆる作用表現(Aktpräsentation)としての認容と同じ意味のやうにも解せられるが、リップスによると內容は對象を考へ出す可能性を有する含蓄あるもので、對象は內容から思考作用によつて闡明されるものである。しかし作用はたゞ對象を闡明するに過ぎないもので、作用が內容そのものを變化さしてゆく效果は運動へのはづみ(einschnappen)を與へる活動であつて、かゝる意味で作用は活動と區別され、活動はたんなる思考によるのではなく、その根底に運動を結果する努力を認めねばならぬのである。われわれはかゝる心眼の作用と努力の活動とによつて內容のうちから對象を露はにする闡明(Explikation)のはづみが認められ、それによつて現象のうちに實在

を表現(repräsentieren)してゐる認識の方法を認めるので、かゝる表現の關係をリップスは象徴的關係と稱したのである。從つて實在の認識は象徴的關係として表はされる主觀の客觀化に過ぎず、かゝる主觀の客觀化においていはゆる自我の移入(Einfühlung)が認められるである。リップスの移入說は一般に感情移入說といはれてゐるが、たんに感情の移入を意味するものではない。對象が感情的に移入されるのは、自我が對象のうちに移入されてゐるからである。從つて對象の意識卽ち內容のうちに闡明された對象は象徴的關係として感情的意味を表現するものである。なほかゝる關係によつて考へられた對象はかく考へることを要求された對象であつて、これを對象の要求(Gegenstandsforderung)として認識に對する强要(Nötigung)と考へた。[8]

現代の心理學でライプチヒ學派を代表するクルューゲルの全態性の概念やヱルネルのいはゆる相貌性知覺(Physiognomische Wahrnehmung)の如きはリップスの感情說を吟味することによつて明かに理解されるものである。殊にヱルネルが言語を客觀的現實性を持つ對象と考へ、その知覺の仕方を相貌性知覺として說明せんとして、言語相貌學(Sprachphysiognomik)なるものを認めんとしたのは言語を自我の移入による象徴的關係として理解せんとするものに外ならぬ。[9] 更にリップスの思想はミュンヘン派現象學派を代表するフェンデルの心理學において繼承されてゐるが、彼は對象と對象の意識との關係を認知關係(Wissensbeziehung)として、空間的關係及び時間的關係に對し特殊な關係として心理學の問題とし、かゝる認知關係を理解する方法として言語的交涉の必要であることを主張する。[10] これはリップスが他我理解の方法として認めた本能的直覺による移入說に基くものであつて、言語的交涉の可能は人間が社會的關係によつて他人と交涉することによつてお互に共通な體驗をすることによるのである。たゞここに問題となる

のは如何にして人間の社會的交渉によつて共通な體驗が可能となるかといふことであるが、これをマックス・シェーラーの如く內部知覺による直覺の一致(Einsfühlung)といふことで簡單に片付けてしまうわけにはゆかぬ。それにはリップスのいはゆる對象の要求といふことを考へる必要がある。內容に表現される對象は自我の要求によるのではなく、むしろ對象の要求によるのである。自我が對象と實踐的交渉をすることによつて實踐的移入が可能となり本能的直覺が成立するのである。そこに自我と他我、更に一般的には對象との實踐的交渉による心理學的場面が形成されるのであつて、かゝる場面においてリップスのいはゆる意識の自己客觀化が行はれるのである。言語はかゝる意味での自己客觀化の方法であつて、キュルペが表現と稱するものも、また供述或は報告と稱するものも對象と對象の意識との關係における象徵的關係としての自己客觀化に外ならぬ。マルチーは言語を記號、特に音聲による內面生活の意企的告知(absichtliche Kundgabe)であると定義したが、そこにはビューラーが言語を敍述機能(Darstellungsfunktion)と考へたのと共通して、對象の要求による自己客觀化の努力が認められてゐる。そしてその表現を可能ならしむるものはリップスのいはゆるはづみとしての活動であつて、それが言語においては發聲の運動である。

要するに言語心理學の問題は發聲運動としての音聲表現のうちに對象と對象の意識との象徵關係或は認知關係を認め、その關係に意味表現の法則を發見せんとするものであるといふことができる。ホルンボステルは音聲と意味との關係について、意味は音聲を規定し、言語は響ある意味であり、從つて音聲は始めから意味に全然適應するものであることを主張してゐる[11]。これは音韻論における古來の音義說を言語心理學の理論から證明するものであつて、ホルンボステルはその事實を比較言語學的資料によつて證明せんとしてゐるが、ウスナッズやニューマンや宮崎美義などは

これを實驗的方法によつて證明せんとした。(12) かゝる新しき意味での音表象(phonetic symbolism)はまたカッシラーの如き象徴形態の哲學として現象學的方法によつて理解されんとしてゐる(13)。これまで言語の研究はフンボルト以來言語の外部形式と内部形式とを區別し、外部形式の問題としては音聲學が、内部形式の問題としては意義學が研究されてきたのであるが、現代の言語心理學はこの二つの方法を嚴密に區別することの妥當でないことを證明しつゝある。ノレーンの如きは言語研究を音韻學 Phonologie と意義學(Semologie)と形態學(Morphologie)との三部門に分類して、音韻學は從來の音聲學 Phonetik と、意義學は從來の意味學(Semasiologie)と區別すべきことを主張するのであるが(14)、音韻學の問題とする音韻(Phoneme)なるものが、音聲に表現されてゐる意味を無視しては考へられない點において、音韻學と意義學とも嚴密に區別することは困難であるし、また意義學がたとひ文法的構造による意味體系を心理學的範疇として認めるといつても、その言語的表現としての文章形態を意義學から區別して研究することも困難である。たゞこゝに問題となるのは意義學を記述的意義學と語源的意義學とに分類し、更に記述的意義學を範疇論と構造論とに分類してゐることである。彼が意義學を意味學と區別する理由はライシヒ一派によつて主張された意味學は彼のいふ語源的意義學であつて記述的意義學としての文法的或は心理學的範疇の問題を取扱はないからである。そこで問題は意義學に於けるこの二つの區別は意味の共時的研究と通時的研究といふことになり、ここに意味についての一般文法學の方法と言語史學の方法とが問題となるのである。將來たとひ實驗音韻學なるものが發達するにしても、それが實驗による組織的觀察を主とする現象學的方法となるか、條件發生的觀察を主とする力學的方法となるかによつて問題設定の方法が違つてくる。力學的方法によつて意味成立の條件を實驗的に研究する場合には意味と

して表現される對象と意味を表現する人間との關係をその心理學的場面の力學的構造から考察せねばならぬ。

形態心理學殊にレギン一派の心理學的位相解析による研究では心理學的場面の力學的構造を緊張體系(Spannungs-system)として、これを構成する心的力の因素としての誘發性(Aufforderungscharakter)と要求水準(Anspruchsniveau)との關係から考察せんとする。しかしこの方法では誘發性は意志の衝發に對して積極性と消極性の二つの方向を示すに過ぎないものであり、要求水準においてもその慾求體系(Bedürfnissystem)の內容が問題にならない[15]。かゝる方法において先づ問題になるのは力學的方法と現象學的方法との關係であつて、緊張といふ意味や要求といふ意味が物理學的概念と區別されて心理學的概念として使用されるとすれば、それらが從來の意識內容について使用された意味と如何に區別され、また如何なる關係において使用されるかが批判されねばならぬ。ブレンターノが最初に意識現象の本質として認めた指向性の意味はヴュルツブルグ學派によつては意志決定の方向を意味するものとなり、期待・緊張などが意識性の內容を示すものとして措定されたのであつたが、後にそれは意志の決定傾向として力學的意味に使用されるやうになつた。緊張の如きは一般に注意力と關係するものとして考へられ、またヴントの如く感情の一方向を示すものとしても考へられた。かゝる意識內容の記述概念として使用されてゐたものが機能概念として使用されるやうになるには記述概念と機能概念との關係が明かにされねばならぬ。緊張の如き概念は果してその現象學的記述概念なしにそれを力學的機能概念として使用することができるかどうか。リップス流にみれば却つて力學の概念として緊張といふやうな言葉を使用するのは意識的事實として認められる緊張の自己客觀化に過ぎないとも考へられる。かかる象徵的關係として闡明される對象の意味が、殊に心理學の方法として、主觀の類推から認められるとすれば、

心理學そのもの丶方法が怪しいものになる。ここに心理學的方法としての言語批判の問題があるのであるが、緊張の如き概念を一つの術語として使用する場合にはその使用意味が嚴重に規定される必要がある。ヘフラーの如きは緊張を空間と時間に對する力學の第三基本現象として考へた。語原的には緊張はむしろ物體の力學的意味であつて、それを意識現象に類推したのであらう。これを本來の意味から解釋すれば、注意の緊張とか緊張感覺とか緊張感情とかは意識內容の記述概念といふよりはむしろ機能概念であつたといふべきである。意識內容に對する關係概念或は函數概念としての機能の意味を意識から超越さして意識現象を說明する概念に構成することが心理學の方法として考へられる。しかしこれがたとひ力學的機能概念であるといつても、それは意識するものゝ立場から意識の場を說明するものであつて、自己の意識を離れて他人の意識をその環境との關係、即ち心理學的場面から說明するものではない。緊張體系なる概念が心的場面力（psychische Feldkräfte）と認められるのは、心理學的場面がそれを構成する人間の意識面から見られた場合である。環境の性質が誘發性として一定の要求水準を有する人間の慾求體系に關して特殊な價値を表はしてくるのは、それが慾求體系の內容を持つ主體の意識面から見られるからである。從つて、かゝる場面學的記述（topologische Darstellung）においては如何にして誘發性が積極的方向を表はし、或は消極的方向を表はすかの理由は說明されない。これが說明されるためには心理學的場面の構造が對象と對象の意識との表現關係として、更に新なる精神物理學的方法によつて考察されねばならぬ。今ここに言語を問題として考へて見れば、言語の表現が言語意識の場面構造として緊張體系から說明される場合には、對象の如何なる內容が言語表現の要求に對して積極的誘發性となり、または消極的誘發性となつて意味成立の條件となるか、即ち對象とそれを言語として表現せんとする慾求

との間に如何なる緊張體系が形成されるかが問題となるのである。アムマンが文章志向(Satzintention)と稱したのはかゝる言語表現の慾求體系を意味したもので、それが統一されて一定の文章形態として表現されるためには、それは文章形態の力學として主語と述語との關係において先づ文章志向の決定(Determination)が行はれ、その決定の要素として心理學的緊張要素が認められるのである。(16) しかしここに心理學的緊張要素といふのは言語の話手と聽手との間に成立する緊張體系における意味の方向を志向し決定する要素である。即ちこれは了解を問題とした緊張體系であつて、文章が正に了解されるためにはその文章形態は話手と聽手との意識において同じ緊張要素を持つ力學的構造を表現せねばならぬのである。ここに了解の基礎として言語共同體(Sprachgemeinschaft)の成立を必要とするのであるが、かゝる言語共同體をたんに緊張體系の力學的構造として說明することはできぬ。言語の心理學的場面としてのかかる言語共同體には、慾求體系の內容が認められねばならぬのみならず、言語の意味變化を說明するためには慾求體系の內容が變化する條件を明かにせねばならぬ。緊張體系における誘發性の座標解析によつては、慾求體系の崩壞及び形成の過程を明かにすることができぬ。例へば緊張といふ意味の表現について考へて見ても、緊張といふ言葉は新しい言葉であつて、恐らく外國語の飜譯であらう。大日本國語辭典にも出てゐない。大言海には採錄されてゐるが、「ハゲシク張ルコト。勢フコト」とあつて典據が示されてゐない。然るに英和辭典や獨和辭典には strain 及び spannen の譯語としてこの言葉が使用されてゐる。緊張が勢ふことならば古くからある張合といふ言葉で間に合ふわけである。しかし英語の strain は string, strong と同類の語であつて緊といふ意味を有してゐる。緊は緊要・緊急・緊切・緊束・緊縛・緊縮・緊密などの言葉が示すやうに糸でキチンと物をしめることである。從つて緊は糾や急と同

義に用ゐられ、傅毅文舞賦に「弛二緊急之絃張一兮」とあるやうに緊急といふ熟語ができるのである。そして strain や string が絃を張ることや絃そのものを意味するやうに、緊は絃をしつかりと張る意味に用ゐられる。そして張は弓に關する言葉であるが、日本語の「はり」は「はる」といふ動詞からきた言葉で、「はる」は古語では主として發するの意味で葉が出ること即ち發芽の意味と「はふ」即ち繩などを延へる意味に用ゐられた。萬葉集卷十九の「春日爾。張流柳乎。取持而。見者京之。大路所思。」や同卷九の「山代。久世乃鷺坂。自神代。春者張乍。秋者散來」の如き張は發芽を意味するものであり、萬葉集卷十三の「山邊乃。五十師乃御井者。自然。成錦乎。張流山可母」の如き張は引延の意味である。この「はる」といふ言葉を漢字の張にて表はしたのは、引延の意味によるものであつて、絃を弓で長くすることで、英語の strain はこの意味での張である。しかしまた發芽の意味の「はる」は「春」とも通じ英語の spring の意味である。spring は發現の意味であつて、それが泉であれば水が涌出することであり、それが春であれば草木が發芽することである。英語の strain と spring は語原を異にするものではあらうが、strain が string, strong などとなると、spring と似てくる。英語の strain に相應する獨逸語は Spannen であるが、これは Spinnen と同類の言葉で引出す意味である。Spanferkel は豚の乳兒であるが、それは乳を搾り出す仔豚を意味する。英語の spane は搾取の意味であるが、それは本來、乳頭の意味であるといふ（Kluge. Etymologisches Wörterbuch des deutsche Sprache.）。Spin 或は Spinnen が絲を取る意味に用ゐられるやうになつたのは收獲するといふ意味が牧畜時代の社會生活と手工業時代の社會生活とで變化してきたことを示すものであつて、獨逸語の spannen が英語の strain と同義に用ゐられるやうになつたのは、それが絲取りから引延の意味に用ゐられるやうになつたからである。獨逸語で

strain に相應する言葉は恐らく straff であり、strong もこれと同類の言葉である。獨逸語で弓を引く意味は spannen で表はすが、英語では strain とはいはぬ。緊急の絃張を弛めるといふことは樂器の絃を弛めて調子を低くする意味にも、また場合によつては兵器を納めるといふ意味にもなる。一般に言語の意味はその表現の場合によつて異つてくるのであつて、張が梁を意味するのも、弓や提燈を意味するのもその表現の場合によるのである。そしてその表現の場合は言語共同體の歴史的社會的存在であつて、「はる」「張」「strain」「spannen」がそれぞれ特殊の意味を表現するのはその言語共同體の歴史的社會的現實態を異にするからである。しかしそれにも拘らずそれらの意味が更に共通に理解されるのはそれらの言葉に一定の共通性があるからであつて、この意味の共通性において言語の了解が可能となると同時にまた意味の變化も可能となるのである。われわれは言語におけるこの意味の共通性と特殊性との關係を言語心理學的場面としての言語共同體の研究から明かにしてゆかねばならぬ。この問題が言語學においては共時言語學と通時言語學或は一般文法學と言語史學との問題となるのであつて、言語學と心理學との關係はこの問題を中心として發展したといつてもよいのである。

ラツァルス及びスタインタールが言語學の方法として民族心理學なるものを建設したのは、言語は民族精神において形成され發達するものであることを高調せんとしたものである。(17) 彼等が民族といふのは同類の意識を持つものを意味するのであつて、たんに人種が同じであるといふだけではなく、一定の社會が同じ文化意識のもとに形成されてゐることで、かゝる意識を彼等は民族意識或は民族精神といふのである。言語はかゝる意味で民族精神のうちに培養されると同時にまた民族精神を育成するものとして問題とされるのである。故に言語の民族心理學的研究は言語のうち

に表現さる民族精神の性格を理解すると同時に、民族精神のうちに形成され發達する言語の構造を說明せんとするものである。從つてこの思想は既にフンボルト[18]において認められた言語の內部形式の問題を民族心理學の問題として研究せんとするもので、特殊な言語の表現形態のうちに理解される思想の民族的特性を問題とするのである。この點においてヴントの民族心理學とはその問題を異にし、從つてそれによる言語研究の方法も異るのである。ヴントは民族心理學の問題を精神における一般的發達の法則に求めたので、民族精神の特殊性の理解に求めたのではなかつた。從つて言語の研究も言語に表現される特殊な民族性を問題としたのではなく、言語の發達する一般法則を發見せんとしたのである。そしてその方法は簡單なるものから複雜なるものへの規準に從つて心的要素なるものを設定してこれから一切の精神現象を說明せんとしたのである。言語においても發音の運動から音聲の變化、語の形成及び形態から文章の構造及び意味の變化といふやうに說明していつたのであるが、その說明の原理となつてゐるものは彼の統覺說である。[19] ヴントの民族心理學がラツァルスやスタインタールのそれと異る點は彼等の心理學的說明の原理がヘルバルトの表象力學說に基いてゐるといふことよりも民族精神の問題を異にする點にあつて、言語發達の說明において心理學的說明の原理を異にする點においてヴントに對立するものはむしろパウルである。[20] パウルが問題としたのは言語史の問題で、それは歷史科學或は文化科學の方法によつて研究されるべきものであることを主張するのであるが、彼が文化科學と稱するものはリッケルトなどのいふ文化科學とは全く異つて發達の一般法則を發見する自然科學と同じ方法を認むるものである。從つて彼が言語史の原理と考へたものはヘルバルト流の心理學による聯想及び類比の說明であつた。言語の變化はそれぞれの歷史によつて特殊な內容の變化を示すものであるが、それらに共通して意味の變化す

る原理が認められる。それを觀念聯合の法則に基くものとして說明せんとするのがパウルであつて、その說明法に反對せんとするのがヴントである。しかし兩者に共通な點は言語の特殊な發達に對してこれを說明する一般の原理を認めることで、この點でパウルはヴントとは違つた心理學の方法によつたとはいへ、言語史の研究に心理學的方法を採用したことにおいては同じであるといへる。ここに言語史と言語心理學との關係が問題となるのであつて、たとひその說明法が聯想心理學の方法によらうが統覺心理學の方法によらうが、言語史の問題は言語發達の一般法則を發見するといふことになるのである。從つてそこには言語の歷史性や社會性が問題とされてゐないのである。この點について再びフンボルト及びラツァルス、スタインタールの思想に基いて言語の歷史性及び社會性を强調して言語研究における理想主義の立場を明かにしたのがフォスラーであつた。(21)

彼はクローツェの思想に基いて言語を文化生活の表現であると考へる。クローツェの思想は既に述べたやうに美學を論理學及び倫理學に對立せしめ、表現の學と考へる。そして彼が表現といふのは概念に對する直觀或は表象を意味するのであつて、直觀或は表象のうちに對象が客觀化されてゐると考へる。從つて表現は內容を統一する形式として直觀されるものであつて、言語はかゝる直觀の形式卽ち表現である。そしてかゝる意味での言語の表現には二つの樣式があり、一つは藝術としての詩(Poesie)であり他は學術としての文(Prosa)である。しかし詩は文の本をなすものであつて、表現のうちに概念は含まれてゐる。かくして表現には四つの段階が認められる。第一は印象であり、第二は表現或は美的綜合であり、第三は表現の心的反面卽ち美的享受であり、第四は心的有機體の物的反面卽ち音響や色彩である。表現としての言語はかくの如き意味において對象からの印象と、それを表現する美的綜合と、それを享受

する心的反面と、人間の音聲としての物的反面とを有することになる。(22) フォスラーはかゝる思想に基いて言語を概念によつて分析した結果であるところのクローツェのいはゆる物的反面から逆に考へる態度を、言語研究における實證主義と呼ぶのである。心理學の法則による言語の說明の如きはかゝる態度であるとし、これに反して理想主義の態度は、表現のうちにその物的反面を見てゆくのであるといふ。即ち部分としての內容の分析から全體としての形式を說明せんとするのが實證主義であり、全體としての形式の綜合から部分としての內容を說明せんとするのが理想主義である。そしてここにいふ內容と形式は感覺と表象、即ち自然と人間を意味するのであるから、理想主義は言語における法則を人間の理性即ち直觀のうちに求め、實證主義はそれを自然の現象即ち物質のうちに求めるのである。從つて言語學の方法は言語表現の樣式論(Stilistik)の問題から文章論(Syntax)語法論(Flexionslehre)音韻論(Lautlehre)へと進まねばならぬので、理想主義の立場からは、言語は精神的表現であり、言語發達の歷史は精神的表現形態の歷史、從つて廣い意味での藝術史に外ならず、文法學の如きは樣式史及び文學史の一部分であり、それらは更に一般人間精神の歷史即ち文化史のうちに編入さるべきものである。かゝるフォスラーの立場からすると言語心理學の問題は全く見直されなくてはならなくなる。言語發達の基礎には人間精神の表現として言語共同體を認めねばならぬが、それが技巧に關する表現である限り關心の共同體(Interessengemeinschaft)であり、それが趣味や意見に關する表現である限り心操の共同體(Gesinnungsgemeinschaft)である。言語の意味及び樣式をかゝる二つの言語共同體の表現として理解しようとするのがフォスラーの言語哲學であり、これはクローツェの文としての表現と詩としての表現との言語における二つの表現樣式に相應するものと考へることができる。フォスラーはかゝる立場から彼の言語哲學とは全

く反對の立場にあるマルチーの一般文法學としての言語哲學を批判したのであつたが、これに對してマルチーは更に一般文法學の可能を主張してゐる。(23)しかしまたロッゲの如くかゝる方法に對して不安を感じながらも、そこに新しき言語心理學の問題を認めようとするものもある。(24)

フォスラーのやうな立場から見れば一般文法學の如きものは理論と實際とを混同する學校文法の如き教育的意義しか持たないものと考へられるであらう。しかしマルチーの如き記述心理學の方法を認めるものにとつては一般記述的意味學の如きものゝ可能を認めるのである。マルチーは、ブレンターノが意識の基本現象を表象と判斷と意慾との三つに分類し、意慾は判斷を豫想し判斷は表象を豫想するもので、美學と論理學と倫理學とは表象と判斷と意慾とに關する規範の學であると考へたやうに、言語の表現を判斷に相應する供述(Aussage)と意慾に相應する關心表出或は感動(Interesseheisende Äusserung od. Emotiv)と表象に相應する名稱(Namen)とに分類し、これらに應ずる規範學を言語論理學・言語倫理學・言語美學として理論哲學に對する實踐哲學の問題と考へたのである。(25)從つて彼の意企する一般文法學は理論哲學卽ち心理學の方法によるもので教育的價値を有するが如き實踐的規範の學ではない。マルチーが言語の表現における意味と稱するものはその外部形式に對する內部形式のことであつて、外部形式としての音聲によつて表現される內部形式としての意味は要するに一般記述的意味學の立場から見れば供述・感動・名稱として表現される判斷・意慾・表象を意味するに外ならぬのである。そしてそれらが供述・感動・名稱として表現される場合の言語形式を論ずるのが自から意味を表現するものとしての語意論(Autosemantika)であり、それらが共に聯關して表現される場合の言語形式を論ずるのが共に意味を表現するものとしての文意論(Synsemantika)で、語意論として

の言語形式はまた形象的內部言語形式(figürliche innere Sprachform)と稱し、文意論としての言語形式は構造的內部言語形式(konstruktive innere Sprachform)と稱する。要するにこれらは從來の品詞論或は語彙論と文章論或は文體論とに相應するものであるが、たゞ構造的言語形式においても、記述心理學の立場から、言語表現における外部形式と內部形式とが區別され、文の構造における內部形式は外部形式から獨立に考へられるのであつて、外部形式と內部形式とは必ずしも一致するものではなく、從つて外部形式の特殊性は內部形式の特殊性を表はすものではない。ラテン語で amavi といつてもフランス語で j'ai aimé といつてもそれは共に同一の思想を表現するものである。それに人稱代名詞が有らうが無からうがその構造的內部言語形式には變りはない。たゞ語位(Wortstellung)とそれに關する語法(Flexion)とは意味の表現に關係するものであつて、ここに構造的言語形式の重要な問題がある。從つてマルチーにおける言語の內部形式の問題はフンボルトやスタインタールなどのそれとは大いにその意味を異にするものであつて、フォスラーなどとは根本的にその立場を異にしてゐることが理解される。しかしこれは記述心理學の方法による一般記述的意味學の問題であつて言語の內部形式が更に發生心理學の方法から考察され得るものとすれば、意味の變化に關する言語と民族との關係が問題とならねばならぬ。マルチーは言語の表現が話手と聽手との間に了解されるといふことはこの表現に共通な意味が認められる。即ち表現の外部的言語形式に對して內部的言語形式が存するからであると考へる。たとひ意味を表現する方法が違つてもそれが同じ意味に理解されるのは、表現法とは關係なく意味としての內部的言語形式が認められるからで、ここに表現法或は表現形式と意味とを明かに區別すべき理由があるとマルチーは主張するのである。或る民族の言語が他の民族によつて理解される場合に、或る民族によつて表現され

てゐる意味が他の民族の言語によつては全く表現されてゐなければ、その言語は外來語或は借用語として使用されるが、これに相應する言語があればそれは母語によつて飜譯されるか、更に新語が造られる。いづれにしてもその言語が了解されるためには兩者に共通な意味が成立せねばならぬのであつて、それはたんなる言語の表現形式と混同すべきものではない。言語においてはかゝる內部形式の成立が可能であるがために如何なる民族にも共通して理解される世界語の如きものの工夫が可能なのである。[26] しかしかくの如き意味に解せられる言語の內部形式はフンケが吟味したやうに從來の意味とは違つてくるのであつて、ここに意味表現としての言語の內部形式だけを考へてみても、その特殊性と普遍性との關係が問題となつてくるのである。

マルチーの一般文法學は言語の特殊性のうちにその普遍性を認識し、そこに內部的言語形式としての意味の一般性を見出したのであつたが、これとは全く逆に言語の普遍性を否定して意味の特殊性を認めんとするものにマウトナーの如きがある。[27] 彼はカントが如何にして數學的認識は可能であるかを問題として理性批判を試みたと同樣に、如何にして言語的認識は可能であるかを問題として言語批判(Sprachkritik)を試みたのである。マウトナーによれば言語の表現はわれわれの社會生活により規定され、社會生活の形態に應じてその表現の意味を變化する。從つて言語において普遍妥當的な意味を理解することはできぬのである。しかし彼の言語批判は言語による普遍的認識の不可解を證明することによつて、却つて言語による特殊的認識の可能を證明したものともいへる。彼は言語と思考との並行論を認める。しかし言語の法則は道德や遊戲の規則のやうに一つの社會現象として人と人との間に成立するものであると考へる。從つてわれわれは言語によつてそれが使用されてゐる社會の生活規範を理解することができるわけである。か

かる意味において言語はワイスゲルベルのいふやうに社會的認識形式であつて言語批判は言語共同體の樣式を理解する方法となる[28]。從つてフォスラーやバイイが試みんとした言語の樣式學(Stilistik)の如きはマウトナーの如き言語批判の方法によつて研究されるものであらう[29]。しかしマウトナーは言語の表現形態を名詞と形容詞と動詞とに分類し、名詞は物の實體を、形容詞はその性質を、動詞はその作用を表はすものとして、これらの表現に應じて名詞的世界、形容詞的世界、動詞的世界を考へ、名詞的世界は神祕的・形而上學的世界を、形容詞的世界は感性的・唯物論的世界を、動詞的世界は科學的世界を表はすものと考へた。かゝる構想は果して嚴密な言語批判の方法によつて證明された言語表現の樣式であるか何うか、それが批判されねばならぬ問題である。言語が生活樣式の表現として批判されうるためには言語における外部形式卽ち音聲としての表現法とその內部形式卽ち意味としての文化意識との關係を問題とせねばならぬ。カッシラーは彼の「象徵形態の哲學」において理性の批判は文化の批判であるとし、文化批判の問題として表現を主觀と客觀との統一と考へ、言語はかゝる表現として主觀が音聲によつて客觀化された象徵と考へる。そしてかゝる表現は主觀が客觀として形成され生産されることで、かゝる形成・生成(Gestalten, Gestaltung, Produzieren)において言語の意味は規定されるのである。そしてかゝる意味の規定はディットリヒのいはゆる共同發生的方法(phylontgenetische Methode)卽ち個人と社會との關係による發生的考察を必要とするのである[30]。

これまで敍述したところによつてわれわれは心理學と言語學或は言語哲學と稱するものとの間に方法論的照應を見出すと同時に、それらは一つの言語心理學の問題として統一されねばならぬことを認めうるであらう。心理學における記述心理學と發生心理學の方法、言語學における一般文法學と言語史の方法とは、表現法の問題として批判されね

ばならぬのである。われわれにはもはや表現學の方法としてはマルチーによつて嚴密に區別されたやうに外部的言語形式と內部的言語形式とを抽象して區別することはできぬ。意味は表現の方法を規定し、表現は形成される意味であつて表現と意味との關係は生活技巧の方法として研究されねばならぬのである。從つて表現學は單なる意味學でもなければ解釋學でもなく、表現法の學であるといふことができる。マルチナックは彼の意味論において言語を實在の意味(reales Bedeuten)と目的の意味(finales B.)とに區別したが[31]、言語における實在の意味は表情音聲であつて[32]、音聲言語としての表現は目的の意味としてその方法が問題となるのである。實在としての言語の意味は解釋された意味であつて表現される意味ではない。表現は解釋を豫想するが、解釋は表現を假定する。言語心理學の問題としては意味の表現を可能ならしむる條件の分析を問題とすると同時に、表現の解釋を可能ならしむる條件の分析を問題とする[33]。しかし言語の表現學は解釋を可能ならしむる象徵過程の法則を明かにする。かゝる意味において言語の解釋學は言語の表現學を前提とするものである。

註

1 F. de Saussure. Cours de linguistique générale. 1915. (小林英夫譯、言語學原論)

2 Marty, A. Untersuchungen zur Grundlegung der allgemeine Grammatik und Sprachphilosophie. 1908.

3 Cassirer, F. Substanzbegriff und Funktionsbegriff. 1923.

4 Koffka, K. Zur Analyse der Vorstellungen und ihrer Gesetze. 1912,

5 Ach, N. Über den Willensakt und das Temperament. 1910.

6 Tumb und. Marbe. Experimentelle Untersuchungen über die Psychologischen Grundlagen der sprachlichen Analogie-

bildung. 1901.

7 Külpe, O. Die Realisierung. 1912–1923,

Vorlesungen über Psychologie. 2. Aufl. 1922,（城戸「現代心理學の主要問題」中のキュルペの報告心理學と「心の記錄」の章參照）

8 Lipps, Th. Leitfaden der Psychologie. 1903.（大脇義一譯「心理學原論」）

9 Werner, H. Über die Sprachphysiognomik als einer neuen Methode der vergleichenden Sprachbetrachtung. Zsch. f. Psychol. 1929. Bd. 109. S. 337–369.（心理學研究第四卷第四輯、解說）Grundfrage des Sprachphysiognomik. 1932.

10 Pfänder, A. Einführung in die Psychologie. 1904.

11 Hornbostel, E. V. Laut und Sinn. Festschrift Meinhof. 1927,

12 Usnadze, P. Ein experimenteller Beitrag zum Problem der Psychologischen Grundlagen der Namengebung. Psychol. Forsch. 1924.

Newmann, S. Further Euperiments in Phonetic Symbolism. Amer. J. of. Psychol. 1933.

宮崎美義「各種感性經驗における照應的特性について」心理學論文集第三輯。

これらの事實については佐久間鼎「音聲心理學」國語科學講座に紹介されてゐるから參照されたい。

13 Cassirer, B. Philisophie der symbolischen Formen, I. Die Sprache, 1923.

14 Noreen–Pollak, Wissenschaftliche Betrachtung der Sprache. 1923.

15 Lewin, K. Die Entwicklung der Experimentellen Willenspsychologie und die Psychotherapie. 1929,

16 Ammann, H. Die menschliche Rede. II, Teil. 7, u. 8. Kap. 1928,

17 Lazarus, M und Steinthal, H. Zeitschrift für Völkerpsychologie und Sprachwissenschaft. 1860.

18 Steinthal, H. Die sprachphilosophischen Werke Wilhelm's von Humboldt. 1883.

19 Wundt, W. Völkerpsychologie. Die Sprache. 3. Aufl. 1911.

20 Paul, H. Prinzipien der Sprachgeschichte. 5. Aufl. 1920,

21 Vossler, K. Positivismus und Idealismus in der Sprachwissenschaft. 1904. Geist und Kultur in der Sprache. 1925,

22 Croce, B. Aesthetik als Wissenschaft des Ausdrucks und allgemeine Linguistik.

23 Marty, A. Über Begriff und Methode der allgemeinen Gramatik und Sprachphilosophie, (Gesammelte Schriffen. II. 2. 1920.)

24 Rogge, Chr. Die Krise der Sprachwissenschaft von heute und die Psychologie des sprachschaffenden Menschen. Arch. f. d. ges. Psychol. 1926.

25 Marty, A. Untersuchungen zur Grundlegung der allgemeine Gramatik. I. 1908.

26 Funke, O. Innere Sprachform. Eine Einführung in A. Martys Sprachphilosophie. 1924.

27 Mauthner, F. Beiträge zu einer Kritik der Sprache. 3. Bde. 3. Aufl. 1923.

28 Weisgerber, L. Muttersprache und Geistesbildung. 1929.

尙ワイスゲルベルの學說については小林淳男「ワイスゲルベルの言語社會學的思想」（「文化」第一卷第四號參照）

29 Bally. Ch, le langage et la vie. 1913（小林英夫譯「生活表現の言語學」）

30　Dittrich, O. Die Probleme der Sprachpsychologie. 1913,
31　Martinak, E. Psychologische Untersuchungen zur Bedeutungslehre. 1901.
32　佐久間鼎「音聲言語と表情音聲」（心理學研究、第五卷第二輯）
33　三井透「言語心理學」（岩波講座「教育科學」8）

第三章　言語表現の構造

一　存在の「あらはれ」　われわれの心はわれわれの生活する境遇即ち一定の境界に生活する場合にあらはれる存在の意識である。この生活の境遇或は境涯が意識を表現する條件であつて、われわれは境界を處置する主體としての存在である。從つてわれわれの存在はわれわれの意識において自覺されるのである。かく自覺された存在の意識が心境と呼ばれるものであつて、心境においてわれわれは心の境地と見地とを持つのである。この心の境地と見地とは、また心の相分と見分或は對象と作用、ノエマとノエシスなどと稱することができるであらうが、心の境界がこの二つの方向に分かれる點に心境の根源的分化があるのであつて、そこにわれわれは意識的態度としての内省或は反省と稱するものを認めるのである。この内省によつて心境は境地と見地とに區別されるが、境地はつねにわれわれが一定の境界に生活する場合の見地によつて變化される。かくしてわれわれはこの境地のうちに様々なる心の相分を見出すのであつて、これを心の樣相と稱しておく。意識における存在の「あらはれ」はこの心の樣相において認められる。これを意識の表現形態と稱し、このうちに心の種々相があらはれる。感覺とか感情とか、表象とか判斷とか意慾とか稱せら

れるものは凡て意識の表現形態である。從つてわれわれは表現形態の構造をこれらの様相の機構から說明することはできぬ。たゞわれわれは如何なる形態が意識の様相として表現されるかを、われわれの境遇から考察することができるのである。

表象は感覺の結合であると說明はされない。しかし感覺が感情と區別され、一つの概念として表象のうちに抽象されることはやはり意識における表現の様相として認められる一つの境地である。表象は形態知覺として把捉される複合性であるとか、全態性であるとかいはれても、それが生活するものゝ見地から離れた境地として認められるならば、それは確かに一つの心理學的見地であるかも知れぬが、その見地そのものが、更に問題となる見地にすぎないのである。一つの事物はそれが認識される場合の生活的境界によつて様々な形態を表現する。その事物の本質といふことはその事物のうちに發見された生活するものの立場卽ち人間の生活態度であるといふことができる。物質の構造についての理論は様々な物理學を發展さした。それは物質がわれわれに強要する必然性の法則であらう。しかしその法則が發見されるためにはその物質が如何なる見地から研究されたかを考へねばならぬ。今までに發見されてゐる物質の法則は物質の本質をすべて闡明したものであるとはいへぬ。これから物質に對して如何なる關心が持たれるか知れぬが、これを研究する關心の態度卽ち生活するものゝ見地から物質の本質は様々な意味によつて理解され、新しき法則も發見されてくるのである。從つて存在は生活するものゝ見地から表現される限り、それは特殊な意味體系であつて、(1) 如何なる文脈によつて存在が表現されるかによつて存在の意味は違つてくるのである。心が様々な意味に理解されると(2) いふことも、理解せんとするものゝ見地によつてその意味體系を異にするからである。存在が如何なる意味に理解さ

れるかはそれが表現される場合の生活者の境界から考察されねばならぬ。そして言語はかゝる意味體系を理解する手段としてわれわれの音聲を通じて更に表現した方法であるから、言語表現の機構のうちに存在の意味體系が理解されるのであつて、かゝる關係から言語は存在の意味であり、また意味された存在であるといふことができる。

言語がかく意味された存在である限り、それは存在の象徴である。存在が如何なる表現の手段によつて象徴されるかによつて存在の象徴形態は違つてくる。言語は存在の意味が音聲によつて表現された象徴であるが、それが色彩によつて、また音響によつて表現される場合には、それらは繪畫として、また音樂として象徴された形態である。同一の存在或は存在の意味は言語としてのみならず、繪畫としても音樂としても表現される。しかしそれが表現される手段としての素材を異にすることのために、素材そのものゝ性質から强要される表現法の相違によつて存在の意味表現にも相違を生じてくる。同一存在の意味が如何にこれらの表現法によつて象徴化されるかを比較して考察することは興味あることであるが、ここでは一般表現學を問題とするのでないから、たんに言語による存在意味の表現について考察してみることゝする。

二　意味の「あらはし」　言語が音聲を通じての意味の表現法である限り、言語表現の構造を明かにするためには、先づ音聲の性質について考察をする必要がある。ここに言語表現學の問題としては音聲學或は音韻學の方法を吟味する必要があるが、それは本講座においては既に佐久間博士によつて音聲學及び音聲心理學の問題が取扱はれたのであるから、それは論じないことにして、ここでは意味が如何なる方法によつて言語として敍述されるかを問題として見たい。

火といふ存在を問題として考察してみると、火の意味はこれを表現する生活者の境界によつて様々に象徴される。それが音聲によつて象徴される場合には、歐州語では Feuer, fire, feu, fuoco などであらはされてゐるが、これらはギリシャ語の πυρ と同系の語で凡てf或はpの發音を有し、更にアルメニヤ語では hur と發音するからこれはp、f、hの發音を基調とする表現であることが知られる。そしてこれらの語に關係あるものとしては flammen, flamo. などがあり、これらはラテン語の flamma と同系の語で、更に flimmer, flackern, flaro, flash などもこれと同類の語である。たゞラテン語で火を意味する ignis なる語はこれらとは全く異る系統に屬するものであるが、火を意味する印歐語系統の多くの語がp、f、h及びr、lの發音に關係あることは火の燃える形態を表現する發音であることが理解される。焔の形態を音聲で表現する場合には日本語でもフラフラとかホロホロとかボロボロとかいふ。しかしこれは焔に限らず物が風に吹かれて動く形態を表現する言葉であつて、英語の burn や獨逸語の bronnen などが flamo や flammen に對して語勢が強く、從つて火勢の強さを表現するやうに、ホロホロといふよりもボロボロといふ方が語勢が強いと同時に火勢の強さをも表現し、フラフラといふよりもブラブラといふ方が物の搖ぐ力の重みを表現する。これはfの發音とbの發音との間に存する發音運動の相違から來るものであつて、この音聲表象の形態と、見られた物體の運動形態との間に共通な類似性を經驗するが、この音聲表象と運動表象との間の類似性によつて兩者に共通な意味が認められ、音聲表象によつて運動表象を象徴することができるのである。これは古くはアリストテレスが共通感覺と呼んだものであつて、空間や時間や運動や形態や數の如き表象は視覺にも觸覺にも聽覺にも共通して知覺される。この問題はその後色々な見地から説明されたが、エーレンフェスによつて形態質(Gestaltqualität)とし

て考究され、また近くは、様相通有の現象(intermodale Erscheinung)の問題として研究されるやうになつたが、(3)この異種感覺の様相間に認められる類似性或は共通性が、一の感覺を以て他の感覺を象徴する意味表現の基礎となるのである。

しかし言語表現の場合に注意すべきことは發音と他の表象との間に認められる様相通有の基礎には發音運動即ち音聲身振(Lautgebärde)と稱せられるものが存することである。(4) pやfやhの發音は音聲身振としては、たんに發聲器管の構造やその機構のみから考察されるべきではなく、これらが表現される場合の生活的境界から考へられねばならぬ。風が吹くといふ自然の現象は息を吹くといふ人間の現象と似てゐる。pやfやhの發音は息を吹く場合に生ずる音聲であつて、印歐語で息吹をあらはす語は phūtkarah(サンスクリット) φῦσα(ギリシャ) phukh(アルメニア)などで、いづれもphの發音を有し、blow, breath,(英) Hauch(獨) haleine(佛)などもbやhの發音を持つてゐる。支那語の風(fêng)呼(hu)日本語のフクなども同様で、これらの發音にはこの息を吹くといふ生活場面の意味が表現されてゐるのである。そして火が生活場面において表現される意味は火を作ることであつて、その方法としては色々あるが、火を熾んにするためには火を吹くことが必要である。我國でも昔は火吹筒が用ゐられたが、一八〇〇年から一八三〇年の間では歐洲でもこの方法が用ゐられた。今でもボルネオやジャバやスマトラではこの火吹筒が用ゐられてゐる。一般に火をおこすには火を吹くことが必要であつて、この火吹の場合の音聲身振がp、f、hとして發音されるので、それは同時に火の燃える形態との様相通有の現象をあらはすとしても、火吹くといふ運動に關して存在の意味を表現したものである。日本語においても火は「ひ」といはれるが、これは「ほ」に通じ、やはりhの音を有して吹く

ことに關係した表現ではないかと思ふ。「ホ」が「帆」や「穗」を意味するのは秀の意味に通ずるので、焰の形と穗の形との類似や風で帆がふくれることから物が出張る意味に用ゐられたのである。發るの意味に含まれてゐる「は」即ち葉の如きも、或はホの音聲變化であるかも知れぬ。かく解釋することができるとすれば、日本語の「ひ」や「ほ」も Feuer や fire や feu などと同じ火の存在意味を象徴する言葉であるといへる。

たゞ問題になるのは支那語の火とラテン語の ignis の意味であるが、ラテン語の ignis は印度神話の火神 Agnis から出來した言葉でギリシャ神話では Volcanus 或は Vesta に相應する。Vesta は爐の女神であつて火山との類比もそれから成立する。Agni は燧臼で火を出すとき、二本の木を摩擦しておこした火のことで、その木を arani といふ。Agni が arani から生れた言葉であることは明かであるが、arani が何を象徴するかは、自分はここで證明する能力を持たぬ。ここではたゞラテン語の igni が他の印歐語系の火を意味する言葉とは全く違つた神話的表現法によるのであることが理解さるればよいのである。次に支那の火であるが火の發音は呼果切或は虎果切又は虎何切とある。これを日本語では古くからクヮと發音してきたのであるが、現代の支那語では火は huo(ホォオ)と發音してゐる。古代ではどう發音したか解らぬが、日本語のクヮとは大分違ふ發音であつて、むしろ日本語の火をあらはす「ホ」と似てゐる。音韻學の問題としてはhとkとの發音が支那語では如何なる關係を有してゐるかゞ明かにされねばならぬが、ここではたゞ支那語の火もp、f、hに關係する言葉であることを認めればよい。火の音韻を成立さす呼はやはり現代では hu(ホゥ)であり、虎も同じく hu であり、果は kuo(クゥオ)であるが何は ho(ホ)である。それから火の意味としては康熙字典によると說文に火燬也南方之行炎而上象形とあり、玉篇には火者化也隨也とあり、古史考には燧人

氏初作火とある。そして禮記の內則によると燧には金燧と木燧とがあつて、金燧可取火於日者とありまた木燧鑽火也とある。火を日に取るといふことが如何なる方法であるか詳でないが、燧人の作るものが火であつて、これを化や隨と同じ意味に解してゐるのは火の生成を意味したものである。それが化を意味する場合には火の生成する狀態を表現したもので、化は hua(ホワ)であつて火の發音と類し恐らく火の發する聲の象徴であらう。风といふ字は呼果切であつて火と同じ發音であるが、これは火の發する聲を表はす語である。日本語でも火がボウと燃えるといふ。それから燬もその發音は hui(ホゥェイ)であつて、灰もこれと同音の字である。日本語でも物が空しくなることをフイになるといふ。次に隨は燧の意味であつて、いづれも發音は sui(ソェイ)である。これは火を作る動作を象徴する語ではないかと思ふ。木燧鑽火也とある鑽の發音は tsuan(ツォワヌ)であつて說文に所以穿也とあるやうに木を穿つ動作を意味したもので、鑿とも通じ、穿は chuan(チォワンヌ)であり、鑿は tsao, tso(ツァオ、ツォ)であつて造や作と同意である。日本語では鑽火を火を「きる」といふといふが、これはやはり鑽火の動作を象徴する語で、キリキリもむなどといふやうに擬聲をも含んでゐる。たんに動作を表現する語としては「つく」とか「つくる」とかいふ語があるが、ドイツ語では火をつけることを zünden といひ、物を造ることを zeugen といひ、築くことを ziehen といふ。そして ziehen は古代ドイツ語では ziohan であり、アングロ・サクソン語では téon である。これによつて支那語と日本語と印歐語とが同系語であるなどといふ比較言語學を主張することのできぬことは勿論であるが、そこには言語心理學によつて說明される表現の構造が認められる。火を作る動作はその道具によつて異り、從つてそれによつて生ずる火を象徴する方法も異つてくる。摩擦して火が出る場合にはシュツとかチュツとかいふが、柔かな物が燃える場合にはホロホ

ロとかボロボロとかいはれ、炭などがおこつてゐる場合にはカンカンとかガンガンとかゴウゴウとかいはれる。燧は恐らく鑚火による摩擦音の象徴で、鑚は打撃音の象徴である。たゞ玉篇には火は瓨であると說明してゐるが、この瓨の意味が明かでない(康熙字典にはこの說明は採用されてゐない)。瓨は火部に屬してゐないで瓦部に屬してゐる。瓨は側救切で甃井とあるが、甃の古文は㼐で井甓であると說明されてゐる。火が井と關係してくるのは如何なる理由によるか吟味して見る必要がある。瓦は說文に土器已燒之總名とあり、火と關係がある。瓨は恐らく瓦を燒く爐か、それを造ることであらう。甃は tsou(ツォウ)で造や作の tsao や tso と似通つた音を有してゐる。井を造る甓が火と稱されるのはおかしいが、火は鑚火即ち家で造られる家火のみではなく火山や火井においても見られる。在思蜀都賦に火井沈熒於幽泉とあり、註に火井在臨邛縣、欲出其火。先以家火投之。須臾隆隆如雷聲、焰出通天、光輝十里。以筒盛接。有光無灰とあり石油を涌出する井のことである。瓨がこの火井を意味するものとは直ちに解釋されないが、この井が火井或はたんに火と呼ばれることは可能である。かゝる表現はたんに音聲の擬聲や様相通有の現象のみからは說明されぬ。ホルンボステルは音聲における様相通有の成立する條件として次の如き五種の要素を擧げてゐる。(5)

一、强さ(力動的アクセント)及びその分節(リズム)。例。動詞意義を持つた二つの綴りからなる印歐語の語根は高調(ヤンビック)では自動的即ち强く能動的の意味を、低調(トロカイック)では他動的即ち弱い狀態の意味を持つてゐる。

二、持續(長短)。例。印歐語現在分詞-n-過去分詞-t-(語尾) nehmen, nahm- nimm, genommen; fahl-fall; lĕvis(輕)-lēvis < lequis(輕)

三、(a)高低運動(上昇—落下)。例。コンゴ語 -tómbúká(登山) -tómbíká(急に引出す)

（b）調子の高さ（旋律運動及び母音の明暗を除く）。例、Hoch : klein, dünn, tief, gross, dick, ジョルバ語 biri（小さい）biri（大きい）gbòrò（狭い）gbórò（廣い）エヮェ語 kọnglọ（縮む）kọ́nglọ́（長く細い）絡るに kọngl（太い）

四、母音の明さ。バンツー語 ーtetema（顫動）ーtutuma（雷鳴）ドイツ語 binden-bund-gebuden（動―靜）

五、子音の明、短、鋭、堅（强調）＝能動性（强み）。子音の暗、長、鈍、柔（軟調）＝受動性（弱み）

しかしこれらの要素から一般に音聲と意味との照應が說明されるかどうかは問題である。かりに存在の意味が直接に音聲によつて表現される場合には、かゝる樣相有通の現象によつて音聲と意味との關係が說明されるとしても、言語の表現は他の條件からも規定されてゐる。これまで言語の抽象性とか多義性とかが言語表現の本質と考へられてゐたが、これらの性質は音聲の象徵化とは別の條件から說明されねばならぬ。(6) 語原の說明を凡て聯想や類推の法則で說明することはできぬが、(7) 言語の變化はこれらの法則によつて行はれる。類推による牽强附會が言語學の方法であつてはならぬが、民俗の牽引附會が、言語の意味を變化さす條件となることは認めねばならぬ。一般に通俗語原學（Volks-etymologie）と呼ばれてゐるものは、語原學の方法としてゞはなく對象として考へねばならぬ。日本語にはかゝる類推による言語の融通性が多く見られる。(8) しかしそれもこれまでの聯想心理學が說明したやうに、聯想における類似や接近の法則からは說明されず、抽象性や多義性が成立する條件としてはやはり民族生活の方法から說明されねばならぬ。存在と存在との間に類似性が認められる場合に、それが如何なる見地から比較されるかによつてそれを認める標識が違つてくる。爐の火も燈の火も火山の火もすべて火であるが、それが何故に火としての共通性卽ち概念を持つかは火の本質が何であるを認識する態度によつて決定される。しかしかゝる認識の態度はわれわれが一定の境界に生活

する場合の見地によつて決定されるのである。火が Feuer, fire, feu などとして表現される場合と ignis として表現される場合とはその意味の構造を異にしてゐるのである。それが一般に火を意味する火の概念となる爲には火の意味は更に爐とか燈とか燃とか燒とかいふ意味によつて特殊化されねばならぬ。一般に言語の意味が抽象化されるのは、それによつて表現される存在の特殊性が認識されると同時にそれを表現する特殊な言語が必要となる場合であつて、火によつては爐や燈の特殊性を表現することができなくなるとき、火はその原意を忘れられて漠然たる意味を表現するやうになる。言語の抽象性はその表現の漠然性或は曖昧性である。最初は極めて明瞭に存在の具體性を表現した言語の性格は、それに類似し、しかもそれとは區別される存在を表現せんとするとき、それが持つ固有の性格に破綻を來すのである。今まで漠然と使用してゐた言葉の原意が理解されると、その適用範圍は狹められてしまう。それの適用範圍が廣いといふことは決してその言葉の意味がそれらに共通した概念を表現してゐるのではない。例へば火の概念を表現するには單に火といふ言葉では表現されない。火は燬なり化なりと說明されるのは火の本質が既に火といふ言葉では表現されなくなつたことを示すものである。しかし今では更に火は燬なりとか化なりとか說明されても火の存在意味は明かにされない。存在の意味が規定されるためにはその存在は樣々に生活するものゝ見地から經驗されて存在の實踐的意味が表現されねばならぬのである。ここに言語の發達があり意味の變化が生ずるのであつて、言語表現の構造はこの存在に對する實踐的意味の表現卽ち言語の生活表現において理解されるのである。從つて一つの言語が共通の意味として理解されるためには、その言語が使用される生活表現の共同體が成立せねばならぬ。それがいはゆる言語共同體と稱せられるもので、言語共同體における理解の方法としては、一般に類推（Analogie）の方法が認

められてゐる。これまでの修辭學で論ぜられて居る譬喩(Metaphor)は類推によるものであるが、換喩(Metonymie)はこれに對して特殊の意義を持つてゐる。プラトンはイデアの世界を認識せしむる方法として例證即ち既知のものから未知のものを知らしむる方法を說いた。しかしそれが言語で行はれるものとすれば、果して既知の言語から未知の世界が認識されるであらうか。それにはソクラテスが考へたやうにイデアの世界を認識する能力は各人が持つてゐるのであつて、たゞこれを自覺さす方法が問題なのである。ソクラテスが產婆法と稱したのはその方法であつて、その方法から辨證法が發展した。ヘーゲルの辨證法においてもその方法の原理には絕對精神といふが如きイデー或はロゴスの世界が豫想されてゐる。辨證法はそれをテーゼとアンチテーゼとによつて表現する方法にすぎないのである。たとひそれが唯物辨證法になつても、物と物との辨證法から物質の本質が必然の法則を以て發展すると考へられるならば、そこにはやはり物質の法則が發見され、物質の本質が表現されることを豫想してゐるのである。言語によつて自分の心が他人の心に理解されるといふことは、その言語によつて表現されてゐる存在の意識即ち人間の存在が他人の意識においても表現されることを豫想するもので、言語の表現法としては如何にして言語を通じて人間の生活が表現されるかを問題とせねばならぬ。それには先づ人間が同じ境界において生活することが必要であり、それによつて人間の存在は同じ境界のうちにその一樣性を表現する。人間が新しい境界に處することによつて新しき境地が發見される。存在の意識はかくしてつねに新しき生活の意味を表現してくる。われわれが共に同じ境地を意識するとき、われわれは互に了解されたといはれる。言語が自分の持つ境地即ち生活の境界を他人の意識に再構成するとき、われわれは言語によつて互に了解することができたと稱するのである。從つてこの同一境地の再現といふことに言語表現の方法が

あるので、それが如何なる方法によるべきかを考究せねばならぬ。

言語表現學の方法は既に述べたやうに言語を理解する方法ではなく、言語を理解さす方法である。表現學で問題とする類推は理解する方法としてゞはなく、理解さす、卽ち表現する方法として問題とされるのである。類推は一つの存在が他の存在の意味を表現することであるが、それには存在の意味がその本質を表現する關係概念として理解されねばならぬ。そしてかゝる概念の言語表現はたんなる語詞として存在の表象を示唆するに止らず、文章として存在を判斷せねばならぬ。そしてかゝる文體の規定において「文は人なり」といはれるやうに最もよく人間の性格が表現されるのであつて、國民性の相違の如きもこれらの表現法のうちに理解される。[9] ここに文體の問題が生ずるのであつて存在の關係が如何に表現されるかによつて語詞の位置が按排され、語詞の活用が生じ、文體が規定される。そして表現の方法としては既に了解のできてゐる語詞を用ゐてその語位の關係から新しい存在の意味を說明するのであつて、もしその場合にそれに使用される語詞の意味が理解されてゐなかつたならば、それらの關係から新しい意味は理解されない。かゝる意味において全體としての文が部分としての語の意味を規定するのであるとはいへない。これを表現するものゝ意識においてはそれぞれの語の使用意味は全體として意識されてゐる構想によつて規定されるであらうが、これを聽き或は讀んでその新しき意味の表現を理解する場合には語詞の意味が全體の意味を規定してゆくのである。從つて一つの語詞の意味が理解されてゐないために全體の意味が誤解されるやうな場合が生じてくる。それで文章を理解さすためには先づ文を構成する語の意味を理解さすことが必要であつて、ここに名詞の表現といふことが問題になつてくる。しかし名詞を類推によつて理解さすことは困難で、それにはいはゆる換喩を用ゐることが必要である。

色彩の名稱を表現する「あか」とか「くろ」とかいふ言葉は類推による表現ではない。「あか」は夜があけてあかるくなる時の色、「くろ」は晝がくれてくらくなる時の色である。「あか」や「くろ」の如き色彩の名稱は明暗の意味から赤・黒の意味になるに從つてその原意が忘れられて色の抽象性を表現するやうになつたが、香の名稱の如きは菊の香とか、「ばら」の香とか、對象そのものゝ名稱によつて香の物質性が表現される。(10) たゞかゝる表現法が用ゐられる場合にそれらの性質が最もよく理解される對象の選ばれることが問題であつて、それも一般に經驗されてゐないやうな對象が選ばれたのでは、たとひそれが表現するものの經驗としては意味を持つてゐても、言語としての表現價値はない。ここに表現の技巧があるのであつて、言語の藝術としての價値もそこに認められる。(11) 音調がc、d、e、f、g、h、a、b、c′などと表現されては音調の藝術的意味は零である。言語表現の藝術的價値は言語を通じて直ちにその對象の性格が理解されるところにある。しかし音譜の如きもこれが音の意味を表現するやうになるには、音譜によつて實際に音樂の練習をすることが必要であつて、かゝる經驗をしてゐる音樂家にあつては音譜による表現は音の藝術的價値を持つてゐるのである。

一般に記號はそれを使用するものと、それによつて表はされる對象との生活的交渉面において特殊な意味を有してくるのであつて、記號そのものに始めから固有の表現價値があるのではない。(12) 存在が意味を成立さす條件さへ具備してゐれば、如何なる記號であつても存在を表現する意味體系の一部分として生活の場面に齎されるならば、それは場面の持つ意味を負つてそれを表現する象徴となることができる。かゝる場合には全體としての意味はその部分としての記號のうちに含蓄され、從つてそれを通じて再現せしめられるのである。しかしかゝる關係は決して記號と意味と

の聯想として說明されるべきものではなく、記號のうちに意味が表現されるので、記號は全體としての意味體系の一部分として、しかもその全體を象徵する部分として存在するのである。從つてその記號によつて意味が表現され、かつ理解されるのは、意識にその記號が印象される場合、それによつて意識の形態が變化してその記號によつて表現される意味體系が意識に形成されるからである。そしてかゝる意味形態の變化が行はれるためには、それを可能ならしむるための形態素質或は傾向が成立してゐねばならぬ。もしかゝる素質が成立してゐなかつたならば記號の與へる印象は何らの意味をも表現しないのである。從つて記號が一定の象徵として他人に理解され、一定の意味を再現せしむるためには、他人の意識にその意味體系を表現する素質が同樣に形成されねばならぬのである。ここに意味が了解されるためには同一條件による協同生活が要求されてくるのであつて、意味は生活の範疇と一致するものであり、言語は協同生活を要求する筈であるといへる。

言語としての記號はかゝる關係から意味を表現するやうになるが、その記號が全體の意味を象徵する部分の表現として選ばれるためにはその部分は全體の意味を表現するだけの性格を持つてゐねばならぬ。例へばサーベルが軍人を意味し、赤帽が荷物の運搬人を意味し、赤旗が共產主義を意味し、お目玉が叱責を意味する如きである。これらは凡て部分が全體の性格を代表しうるだけの表現價値を有するからである。かく記號としての意味は部分のうちに全體を表現することができるので、部分は全體の性格によつて特殊な意味に表現される。手は身體の一部分であるが、それが如何なる機能を表現するかによつて手の意味は違つてくる。手は筆蹟のことにもなれば、碁や將棊の手のことにもなれば、援助の手のことにもなる。手が一般に術策を意味するやうになるのは將棊の術策と政治や商賣の術策との類

推によるものである。言語は一面その表現の抽象性から意味の融通性と多義性とを有し、意味を變化するやうになるのであるが、更に他の一面においては表現の象徴性から意味の代表性と多義性とを有し、意味を變化するやうになるのである。

三　言語の「あらため」　これまでは言語は如何にして意味を表現するかの問題を考へて見たのであるが、次に表現された意味は如何にして再現されるかの問題を考へて見よう。

言語は社會的事實としてわれわれに經驗される。それは音聲としても、また文字としても存在してゐる。それらの言語的存在からわれわれはそれに表現されてゐる意味を理解せねばならぬのであるが、それと同時にその言語をそれによつて表現されてゐる意味と同じ意味において再現せねばならぬのである。言語の音聲がたんに音聲として再現される場合にも決して他人の音聲と同一のものが再現されないと同様に、その意味も決して他人の意味したものと同一のものは再現されえないのである。從つてそれは嚴密な意味では新しい表現であつて再現とはいはれぬかも知れぬ。兒童語はすべて模倣だとはいへぬが、たとひそれが模倣されたものであつても、それは成人の言葉とは違つた兒童語としての新しい表現である。しかしそこにはやはり再現における意味の共通性と特殊性との關係があつて、この關係によつて言語は社會的事實として保存されると同時に廢棄され變化されるのである。(13) この意味の共通性と特殊性とは言語における二律背反として言語の辨證法的發展における契機をなすのである。しかしこの意味の共通性と特殊性とは言語の通用する社會的條件であつて、これを意味の成立する認識的條件から見れば言語は意味の融通性と限定性との關係から表現されるものである。(14) われわれの經驗は特殊なるもののうちに共通なるものを見出してゆく。對象の革

か別性と類似性との判斷は言語表現の構造を變化さしてゆく主要な條件である。言語は最初經驗された特殊な事象について表現される。そしてその言語はそれと共通な事象に適用される。しかし事象における特殊性と共通性とは一定の關係においてその意味形態の限界を定める。それが言語としては融通性と限定性として表現されるのである。そこで言語の適用範圍が規定されるのであるが、その規定の方法によつて言語の意味は變化してくる。たとへば日本語で「あを」といふ語は靑を意味するのか綠を意味するのか曖昧である。しかしそれだからといつて古代日本人の色彩感覺は靑と綠とを區別することができなかつたとはいへぬ。現在のわれわれでも色彩を變化して赤から紫までの變化を辨別してみると、色彩に對する辨別閾の數は三千五百四十九閾もあり、從つてわれわれに辨別されうる色彩の數もそれと同種類あるわけである。しかしわれわれはそれらに應ずる色彩の名稱は持合せてゐない。これらの色彩變化に應じて一定の名稱を與へようとすると色彩をその差別性と類似性とから一定の種類に分類してそれに一定の名稱を與へねばならぬが、實際にはその色彩命名の限界を定めることは困難である。靑と綠との間には靑ともいへず、綠ともいへぬ色を經驗する。更に綠といつても、黃であるか綠であるか決定し難い色がある。日本語の「あを」がどの程度の色を意味したかわからぬが、もしそれがブルーとグリーンとの中間色であつたとすればそれが「あを空」といはれても「あを木」といはれても差支ないのである。われわれの實際生活において經驗される色彩は事物の性格を表現する色彩であつて、色には色々の個性があるのである。從つてわれわれに最も屢々經驗される原色だけはそれをあらはす抽象性の意味を持つやうになるのであるが、その他の色はそれをあらはす事物の種類によつて命名される。日本語で色彩を表はす形容詞は「あかし」「あをし」「きいろし」の三原色に限られてゐるが、それはかゝる理由に基くものと解釋

することができよう。しかしわれわれは色彩の研究から色彩に關する學術語の設定を要求する。この場合これまで使用されてゐた言語をそのまゝ使用することは不便である。そのために色彩に關する名稱は新たに工夫して設定されねばならなくなる。殊に香料の名稱の如きは最もその必要を認められるものである。たゞその表現法は如何にすべきかが問題であつて、音調の表現の如く符號にすることもできるが實際には不便である。いづれにしても名稱の設定にはそれのあらはす對象の意味が客觀的に規定されることが必要で、ここに言語表現學は物理學及び心理學と協力してその表現法の問題を研究せねばならぬのである。

その他假名遣、國字、方言と標準語、基本語、飜譯語、外來語、國際語の問題など表現學の方法から論ぜらるべき多くの問題をこの節に遺してゐるのであるが、既に豫定の頁數も超過したので頁數を限定されたこの論文においては一々詳しく論ずることはできぬ。しかし要するにこれらは意味の融通性と限定性及び言語の共通性と特殊性との關係からくる言語の二律背反の問題であつて、これを如何に解決すべきかは國語政策としての實踐の問題であらう。その理論的研究としては言語史と一般文法學との研究から言語の辨證法としての國語教育の方法が研究されねばならぬ。殊に國語史は國民精神文化の歷史を物語るものであつて國語教育にとつては重要な意義を有するものである。(15)

註 1 Noreen-Pollak. op. cit. S. 217—219. ノレンが意味範疇の體系或は意味體系と稱するものと解せられてもよい。意味の問題については Mathes, P. Sprachform, Wort-und Bedeutung kathegorie und Begriff. 1926. を參考されたし。

2 増田惟茂「文脈並に其層の交錯」(心理學研究第三卷、一三一—四四頁)。増田博士が文脈といふのは精神現象を構成する方法であつて、かゝる構想はヘニングスワルトの思想にも見られる。彼が文脈(die Ordnung des Satzes)といふのは紛失し

た意味の糸口を索めてそれを言語に表現してゆく判斷の順序をいふ。Hönigswald, R. Die Grundlagen der Denkpsychologie. 1221.

3 Schiller, P. Die Raumigkeit als intermodale Erscheinung. Zsch. f. Psychol Bd. 127. Heft. 4 bis 6. 1932. （心理學研究、第八卷解說、六二七—六三〇）この問題については佐久間鼎「音聲心理學」參照。

4 Wundt, W. Völkerpsychologie. Die Sprache. Bd. I. ヴントは言語音聲 (Sprachlaute)においてこの問題を取扱つてゐるが、これは嚴重にいへば佐久間博士のやうに表情音聲と音聲言語とに區別して考察されねばならぬであらう（佐久間鼎「音聲言語と表情音聲」心理學研究第五卷一一三—一三三）。しかし音聲身振はこの二つの場合において問題となる。

5 Hornboster. op. cit. S. 336. なほこの問題については同論文集中にウェステルマンの研究がある。彼は音聲の形象を重複、調子、母音の量、母音の質、子音の筋肉緊張から考察し西アフリカのスダン語についてその音聲と意味との關係を論じてゐる。Westermann, D. Laut und Sinn in Westafrikanischen Sudansprachen. 315—328.

6 Marty, A. Sprache und Abstraktion. Über die Ähnlichkeit. Gesammelte Schriften. II. Bd. 2. 1920.

Porzig. W. Die Leistung der Abstrakta in der Sprache. Blätter für Deutsche Philosophie. 4. Bd. Heft. 1. 1930.

7 Erdmann, K. Die Bedeutung des Wortes. 1925.

8 城戸幡太郎「日本語の原始形態」心理學論文集2、昭和四年。古代日本人の世界觀、昭和五年。參照。

9 Humboldt. op. cit. Finck, F, N. Der deutsche Sprachbau als Ausdruck deutscher Weltanschauung. 1899.

城戸幡太郎「國語の表現法と國民性」日本精神研究第一輯「日本精神論」昭和九年。

10 Henning, H. Der Geruch. 1916.

11 Marty, A. Das Problem in 'Farbensinn,' 1829.

12 Ach. N. Über die Begriffsbildung. 1921 アッハは記號が意味をあらはすやうになる意味賦與の過程を實驗的に研究したので、○△□の大小、輕重、色彩を異にするものを作り、これらと無意義の綴字四種とを聯合さすことによってそれらの語が有意義となってゆく過程を觀察したのである。

13 城戸・澤田「形容詞の意味變化について」日本精神史論纂第一卷、昭和七年。

14 城戸幡太郎「言語表現における意味の融通性と限定性」(心理學研究、第九卷、松本博士古稀記念論文集)

15 Naumann, H. Versuch einer Geschichte der deutschen Sprache als Geschichte des deutschen Geistes. Deutsche Vierteljahrschrift. Bd. 1. 1923.

Litt Th. Geschichte und Leben. Anhang: Geschichtsunterricht und Sprachunterricht. 1917.

昭和九年十月五日印刷
昭和九年十月十日發行

國語科學講座
（第十回配本）

東京市神田區錦町一丁目十番地
編輯兼發行者　株式會社　明治書院
代表者　三樹退三

東京市神田區三崎町二丁目一番地
印刷者　株式會社明章印刷所
代表者　細谷祐三

發行所　東京市神田錦町一丁目　株式會社　明治書院